

学会名 第60回日本リハビリテーション医学会学術集会
(令和5年6月29日～7月2日)

研究テーマ コロナクラスター下の回復期病棟における言語聴覚士の役割

病院名 健育会 ねりま健育会病院

演者 ○発表者：グラハム 亮子 (言語聴覚士)
大村優慈(理学療法士)¹⁾ 二瓶太志(作業療法士)
岸下亜希子 (理学療法士) 酒向正治 (医師) 1) 湘
南医療大学 保健医療学部 リハビリテーション学科

概要

【研究背景】院内で3度のクラスターを経験し部門としての振り返りを行った。
【研究目的】回復期病棟コロナクラスター発生時の言語聴覚士 (ST) の役割について検討した。
【研究方法】3回のコロナクラスター下におけるST介入患者を調査対象とした。STはクラスター下でリハビリテーション医療が制限されている中、隔離に伴う患者の孤立を防ぐ為に、PPE装着手技を強化し患者との会話機会を確保した。
3回のクラスターそれぞれの食形態 (主食・副食・水分)、嚥下グレード (嚥下Gr)、FIM認知項目、訓練単位数を後方視的に調査した。STの感染状況についても調査した。
【結果】1回目では嚥下機能が低下する患者の割合が高く、食下げが必要であった。2、3回目は安全な食形態を設定する事が優先的に行われた。
【考察】3回目でFIM認知項目が向上したことから、クラスター間もリハビリを継続する事が認知機能の維持向上に寄与したと考えられた。
【結論】1回目、2回目はST業務が感染拡大に関与している可能性が考えられた。STの言語、嚥下訓練場面は飛沫感染リスクが高いため、感染症対策の確実な実施が求められると考えられた。

